

## Ⅱ 表現化に視点をあてた指導法の構想

### 1 精神薄弱教育における学習指導の原則

従来から精神薄弱児の指導では、その行動や心理の特性から、いくつかの原則的なパターンが考えられ、実践されてきた。これらの原則は、極めて基本的常識的なものであるが、列挙すると次のようなものである。

- (1) **具体的操作の原則** 指導は、子どもの体験的具体的行動を通して進められ、子どもの直接的な生活と結びついた定着が考えられるものであること。
- (2) **スモールステップの原則** 指導は、できるだけ抵抗の少ない内容をきめ細かく準備し、興味、関心、意欲を欠いすぎ折感を味わわせることのないよう留意しながら諸能力や態度の定着をはかること。
- (3) **反復練習の原則** 指導は、理解させる（わからせる）だけでは十分とは言えない。くり返しの指導により確実な諸能力の定着、態度化をはかること。
- (4) **生活活用の原則** 指導は、子どもの生活の中でそのまま生かされていくような工夫が、常に留意されていること。
- (5) **集団参加の原則** 指導は、人と人とのかかわりを重視し、集団の中で高められるよう工夫されていること。
- (6) **個別指導の原則** 指導は、一人ひとりの子どもの生活経験、発達段階、学習能力などの確にとらえ、個に応じた指導の徹底をはかること。

精神薄弱児の学習指導は、この原則により、一人ひとりの持ち味を活かして、意欲的に学習と取り組んでいくなかで、『生きて働く力（生活していく力）』を定着させていくことである。ここで学習指導の原則について述べた理由は、表現化に視点をあてた学習指導が、従来からの指導とは異なった新奇を追うものではなく、初心にかえて、従来の学習指導を見直そうという研究取り組みの基本的態度があるからである。

現実の問題として、多様な子を前に、「何を」「どのように」指導していくのかとなると複雑な子どもの行動、反応が、十年一日の如く問題となっているのが現状である。

### 2 精神薄弱教育の目標と学習指導

精神薄弱教育の究極の目標は、子どもの社会的自立であることに間違いはない。従来から、目標としての社会自立といえば、「家庭の一員としての役割を果し、積極的な市民生活を送ること。職を得て、社会的経済的生活に参加すること」を旨としてきた。対象とする子どもの重度化、多様化傾向に